

武馬見笑集

乾

和装本

ケ 5

44

84





大坪武馬見笑集 乾

大丘馬れんを言ふとして書あつりて云はれぬと
 これも花咲ぬ筆の臨る世と又たしむるも
 あらうなり後の字は基ふもとよひて二言とる
 て或人より足せ侍々れはさきあるを奥秘乃術也
 武家の珍語といふ所一門に於て執行するの師と
 るは是はあつて書ふ名付て世に弘めやつれり
 下は此れ者を知るべき後とてひと川を系術と
 りとほく使ふところなりとて書ふなりとある
 人より其由告ぐれば則武馬見正集と題し

これよりいへども 早く浅きをそはれん
しる出るきり却て古宗此位もちりい永く
るれんもや月子諸宗大明神もあへんるをい
見正の正とりし字を除て第の字上改て今武馬
見第集ととりし元け一語の心をるをあそれぬ
をすとりしふの御を出入りし宗人あへれぬ
馬苦もる苦めり宗人も又苦むいつまう不二
らんやもるも天地同根の有情人も天地同神乃も
情もるも一理一分殊よりして宗人とると説くも
るも天地の理也可知く明鏡止水乃理干時



天和三癸亥歲霜月中旬東武青山下六木院士
春生軒小野定易書

二 此の巻の初めに
一 此の巻の初めに
二 此の巻の初めに
一 此の巻の初めに
二 此の巻の初めに
一 此の巻の初めに
二 此の巻の初めに
一 此の巻の初めに
二 此の巻の初めに
一 此の巻の初めに
二 此の巻の初めに

大坪武馬見笑集目錄

- 一 馬を武士の勤へ道程を知る事
- 一 古今の大なるを嗜て損益を知る事
所 和漢の勇士言行の事
- 一 宗人の感念ある事
- 一 武士此學へ入らば流を布とす事
- 一 師の心持あり
- 一 本るゝ胎教とて竹あり
- 一 宗師の執行あり

- 一 馬と宗人との遠あるを知る事
- 一 馬と宗人とのあはれを知る事
- 一 馬と宗人の目着をみる事
- 一 同目着の術を知る事
- 一 馬に廻り換へ法を知る事
- 一 馬の縄を介の糸縄と知る事
- 一 馬の蹄逆らわす時を知る事
- 一 馬を宗人する日を知る事
- 一 馬を宗人する所流儀を知る事
- 一 馬を宗人する時を知る事

- 一 桐樹のふゆさくさく
- 一 牧のふれい
- 一 約仕立極れい
- 一 と申下れるを本として習あつ
- 一 けと瞬とこととを母き
- 一 曲るれ重る遅と早をき
- 一 春うめ曲るてゝ一代重るをき
- 一 兼曲あつるを来時れ
- 一 曲うたふる本をき
- 一 古農商うらうらてゝを撰法れ

- 一 物を見る馬のいふ
- 一 女舞入るれい
- 一 上田とりふ赤人のい
- 一 るをいふ
- 一 白馬の節令れい
- 一 正月宗初れい
- 一 養目れ宗候のい
- 一 少逢人の馬宗始れい
- 一 大追物笠懸流瀉馬れい
- 一 鞍の足御念い

- 一 瀟馬指掛瀟る沓のよ
- 一 るの性^性之態^態して装束あるよ
- 一 四季の素振のよ
- 一 庭木の活のよ
- 一 る場は籠籠のよ 所亭^{所亭}は庭^庭候^候のよ
- 一 庭の素振のよ
- 一 陰の庭陽は庭のよ
- 一 るを始て庭へ入る特のよ
- 一 庭へ押れよ
- 一 ると縁る人の庭へ押れよ

- 一 主人のん特あ^あきハ子孫亡^亡候^候
- 一 るよ^よと^となる人^人は子孫^{子孫}不^不々^々
- 一 るの第骨を切^切るを制^制林^林あ^あす
- 一 筋を切^切ると齒を折^折出^出すを急^急を急^急
- 一 是の筋を切^切はる悪^悪交^交り^り
- 一 筋を切^切ると武士^{武士}は乃^乃多^多く^く云^云及^及理^理のよ
- 一 筋切^{筋切}ると^と起^起して祝儀^{祝儀}未^未だ^だ時^時嫌^嫌及^及理^理を急^急
- 一 同^同筋切^{筋切}ると^と扱^扱多^多知^知る^る
- 一 筋を^{筋を}切^切ると^と何^何射^射る^る苦^苦痛^痛知^知る^る
- 一 齒^齒切^切麻^麻子^子ま^まする^るのよ

一 流儀の本目四流の至極なり

一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり
一 流儀の本目四流の至極なり

方陣武馬見笑集 乾

東武

小野定易昌編

一 武士は皆一よ節なりなり易小引重致
を以利天下としり亦或古傳より天子御行せ
むとは新しきとある地を趨行せんは
ふ敏物なりしは是兵具の本より圍の大用
ありとも記せり昔時流の宗師日本武尊
の洞をのせし武名論より馬の馳行自在は宮と
もありいしとあるよふより一人をハ武士也
といふことして新職なりしと受けぬふし

人たるふふふふふふ一付も報をへ腰小指さるちちり
志しふるちれせれ世のこは日用此節山
武門のたろろ志るもこせ人の心たに能ふか
とれり或は名利不すれのみめりり衣食飽暖の
餘を慰み弄ひの事とまらもあり凡武の勅此そ
内も深き法子とありぬや一皮名利の心ふ
ひつをさよんちとてや初らる志ること能き
志く執務をたろろのありあるをこくるも
さしてふるさつちやふもさる妙通を感
得志ふるたをさつちとせ上れ奴童をとほと

より上よありぬんるりといひ世は落る者あり
るんらけ親の草道を志るもたらる人もんや
唯名利不辭て**做**の執務あてりりりりり
一るら園の魚亡武運の長短かたをる項羽は
追とりた名るる余我切切立暴業を乞や 楚霸業
をあらせり我ねれ既そ太子を甲斐の躰小められ
晴洲の逆浪を流めりりりりりりりりりりりり
契丹の大羽耶律氏善馬小宗一た之嶮を隈く敗
軍の疑心逃き再りりりりりりりりりりりりり
七良るるりりりりりりりりりりりりりりりりり

つを義経の太夫思ひ古今の奇功をきて備信の保生
月もと近代の名譽を成せりそれ大將とせんする
人をもさかん一ぬまきく人も徳而る馬の家もこれ
て其装の業を継承け術を志す人も人や志する人も
此と漢武とてるを好む大宛を伐て武を蹟し虜
公を屈辱れ業を令歎しそのれ國を失るより我
國の衆を仲細宗盛るといふの下と云名を申し
國に多し礼を他せりけ涼しとんととむしと
不及ふ代ふ此より從中庸の叶しとりのめて何そ
の及ももりとも古流に云戦を志するまに礼を

戦を好む先之と水火と民に利く申るやこころ
遠く却る民の害とかなる故に士は死するに細
志る一うのす一編と着して家を汚し此乃
此とるもとるも也

所 史書に云劉豫州股の肉れしとるを人々嘆き
て云我乱せしとき名を懐こ功をきき一日とる
上人のすむ日なりそれら為し鞅のあつた此肉
潰て瘦骨の微を令体出と後よま月股の肉
肥しと大切を為人の勅をともをかこれ
倭國の名將八幡虎少将より馬を乞ふお申し

其宗法弟得しと云え歎け圍を破て終小東夷を
并後一と大庭を了れと云らふとて徳
西八郎れ夫あとのき齡を保てり又原平乃
我子平家れ方より景法盛次とてり大剛の先
師をいめりて二十歳をより出りて徳各文
子の善馬上宗て達宗れ父えあふ小忠すそ
迎合とらとあふそを比々城内へ引入ぬ中華
中朝より小せふかむ此人の武藝をうらむ
一時し廣野ふかむ能棋立見右報を唱え
て親愛をあゆめよと宗令軍れ札を常

小るしと教正の勤とせり要れ世小いりて武
功と云し人れ子孫皆安んずる富貴なりと
此の経馬とれ昔之経志とをりる小傳り此方理
小脊いりて一買利をおそふ此一二人を
きこれとて我用をかむとあふはる物也亦或
由化とこれハ大方坂經久のしつば八曲衣工高買之
かうく已うと論れ此家職強勤む武士ハりるの
術勝負の存理を念我家職とて学問少
い小業もけ家業を明ふせん人々為たう今ち
る評推ししとて一と云物と唱ふ或ハ一概と

お泉法師の言を爲人々が之を去りて別
道と云ふ我田孫に人の田を芸物するや
亦云歳六十とありてこれ武を合するの
爲あるなりと云ふけおの詞志ある士は亦
流を也

一 衆人の惑乃あり尚世に新流小宗を以て隆興
の風俗と惑古宗に教小惑場あり惑る小
惑我の言とあり他行の人の言とあり
け位をりゆせよ **新**と云ふとありて古流
小宗と云ふは古流に因りても亦宗小

いりて人の言とありて宗術を學べ其流
儀をち切りて師を貴きを一知りては始終小宗
を立て師に面影を後を也

一 武士の學より古流より因りて小宗八条當流是
をこそ古流といふ矣在れ流小宗と云ふは
教亦亦なるといふとも多分古流の流位を過或
を神理佛儒理に借て其流は眞根と云ふ
てを中よりとり亦流外惡馬隆興此風俗也
と云ふ但今世の人は亦亦なりし中より新
流と名宗されし奇特なりと云ふ亦い

の教をそく得すくゆに相傳くを遺傳しと云
途ゆくをくく即ち學子以明く此用しと云くは
相傳は其介名利此念よりなき流傳を他は
流の元祖彼流傳は宗原といふれを正統のそめ
よりゆくはく更くく相傳くはく古宗の傳は
物とあり人や愚者もふをを相傳はく一はあり智
者もふをすまき一はありとしといふは其流傳
具く一宗人ふては古流を肖す我流を建は失多
かりしよりなる軍用のたふとありゆは昔特
日本武尊より代々れ名傳は術を傳は流傳

御南家の始よりより古流は念を以て養年の
統を而して多ありなる人其場ゆは
よと一たるの念をより功をあらはるを以て世を
志くして相傳はく又古流の教多ゆは
いふるは六十有餘年以來はるなり
一宗傳をこまやふより得しと云はれ位はくありあ
りゆく人の傳もぬす者れはくは名利の慾
ひとひをそく多流傳はく世にあり又志
のいふは其流不可ぬは其傳を免もるを破は端

一尚流上つて胎教を本る事也四角六方三岐三折三六十七所八所其亦十二の處持と云曲尺ありて柳御正れを不すして心そのまを居んとする處上教を以ていふ厚はこれ柳を正く巧くは其子に授けし母の心也よ持を其子に授けり志ありて右に曲尺ありて我をせめし事人の神あるまはるの神小ひつてよ上は心清りたるれ心清りたるは心清りたるて子細を以て授けし神の育りたる處に授けし神の育りたるを神の育りたるを神の育りたるを

一 事理不三しかたなりて小執行
一 ありハ正邪は命持し端とよ下と成
一 入境也れりて一ありて是れ我の形と云ふて
一 ありて其容終てふかざるうとて紅華を
一 素粥のを極一貫其位ふつてハ執行あり
一 執行の心は逆ふむとてしををけし
一 我居静静ふ絶向く柳して我を以てし作
一 ありて其を以てしを以てしを以てしを
一 尚後淳沆用あれを發て止を感して云く氣と魂

とふひ多し法防重化人事理を得しそ病ふ不那
然しそあふふはふひ流の月小返屋はふふふ
糸あけのあつことつうくことと如と照し時人
のあとと志ふ心事も理をかこつうと判して凡乃
依らうし自然と一受れ位と通達しし言をある
海勝を中一あそれふんと糸夜毎ふことれを息と
ひうたをいひあふると同くをせれ一受て法
だふか々勢存せとて辨ゆくふん度く致す
一ふれ糸人ぬとて一物徳といひもふ山人をふれん
何もふれ物れぬひとつうをを理をさくくぬ也

ると糸人と判一ふふふヤこれふふ美曲た
こつ病礼あふ物唯ふと糸物とさうくん物
てさうし一物と可とを了れんと物ふふあ
らとまふ一物ぬかた河ささうく手とさう
とさうん善原もつふ

一ふを糸ふあまうて我ふふし一ぬけあふ
とふふとさうさうて膝行あつ賜を履てふ
ふ物あつ履てまけの履あつ賜を加の履あ
ふると相糸をよるささうをあふふふ
ふふ

一 すると糸と目着下、まゝに左と右の好
をみまゝの好、まゝに糸の好、まゝに
んむとの好、まゝに眼を好、まゝに
いと眼を好、まゝに眼を好、まゝに
一 すると糸と目着下、まゝに左と右の好
をみまゝの好、まゝに糸の好、まゝに
んむとの好、まゝに眼を好、まゝに
いと眼を好、まゝに眼を好、まゝに
一 すると糸と目着下、まゝに左と右の好
をみまゝの好、まゝに糸の好、まゝに
んむとの好、まゝに眼を好、まゝに
いと眼を好、まゝに眼を好、まゝに

かゝの糸と目着下、まゝに左と右の好
をみまゝの好、まゝに糸の好、まゝに
んむとの好、まゝに眼を好、まゝに
いと眼を好、まゝに眼を好、まゝに

一 隅と糸と目着下、まゝに左と右の好
をみまゝの好、まゝに糸の好、まゝに
んむとの好、まゝに眼を好、まゝに
いと眼を好、まゝに眼を好、まゝに

一 隅と糸と目着下、まゝに左と右の好
をみまゝの好、まゝに糸の好、まゝに
んむとの好、まゝに眼を好、まゝに
いと眼を好、まゝに眼を好、まゝに

一 弓と縄あり **真** 歌謡と仕掛の傳ありより先師
より **聖** 集曲馬の長巻に巻くこと記を志す
きともはまをば他力を借方候を為と云ておぼ
細と号して不用竹を子徳を鼓なりをのき
と糸を打をともし 万正一貫れ又徳よもろし
とれし かつらへ一團ありて 汗を不測なり

一 五折と痛惱ありんよ一物ちてより片おもひし
いふ色けき付るを糸しん
一 壬申の日はを糸よりまきかきし今をりし
るよよといふしんよんいふた糸の書しんをそあり

一世俗にだんぞといふと 尚流よてハ 略道と云ハ 八條
よは 大馬とゆは 内なるは 駟威馬と云ハ 亦
或人の懐よは 大馬と云 東國よのこありといふ
安流の流よは 大魔と花をけ 神を伴ふありを
時をる 眼とありし 道是と云ふも ぬむむハ 靴下
流にぞ 倒れし されし けし 喪を流す 為新
癒しし 不し 程神れし 死を也 枯け ぬいし ぬ
祇く 魔障いし 本流を 志し 尚流よ なる
と 皇放し 大賜と 出て ぬいむと 昔し 流
りたりし 其 洲山 相あり 倒し 針あり 糸あり

秘事

一 臥するをねがひてそれききよむる
きわつて胸言る程にて来るものなり
其馬を乗せうきききききききききき
のいしんまを成りぬ流しよたる大腸の跡
とさしししししししししししししししし

一 首を振焼く日仇折るめちききききき
一 息をききききききききききききき
とふふふふふふふふふふふふふふふ
むとむとむとむとむとむとむとむとむと

一 兼ゆゑ忽と息遣をそそぎききききき
一 合と延る處よりて立留るちきききき
一 合ありけ時をそとめき其役を通しき
一 合ありけ時をそとめき其役を通しき

一 了り兼あけしハ腸常強つて志を新蘇を
一 一息向といふ紅兼人ふふ志人きききき

宮高^高角微羽の習あり、大息小息留息法
息片息清息片信授あり、そのと小を宗等と
いふとけ徳よとをいふ、あふは勿論平生宗
ともたのむ時を可とを凡有情のわいつきり、津
の息を以て命とせざるや、能く調子を字字ん平あり
事なり

一 汗合としかと息同のともや、るる離の卦とあり、
つとて外太陽あり、内法なり、つとるふふ、つと
息法とこれ、つとる息と死するち、つと汗とい、一息と
ち、つと平根あり、かく汗流る、つとれ、つとく小毛の、

一 汗くあつるを二汗と云ふ、二汗を二息の儀也
割のかけあり、つとかく汗を是の氣入るを、つと
か、つとを休めや、つとを白汗とい、つと也、三汗は
三息や、陰囊の根より汗を、つとく、つとく、
汗白汗なり、二汗と云ふ、つと、四汗は、四息なり、
汗を、つと、汗陽を、つと、かけ、つと、つと、
は、八分の息と云ふ、つと、あ、汗を、あ、息なり、
想、身より、汗なり、流る、つと、つと、つと、
休め、つと、つと、つと、は、息なり、
つと、つと、つと、つと、つと、息、回、あり、つと、

一 願いはずともいふ事ありあらず

一 地をよむとして牙一めつうきとるものあり

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

一 志をよむともいふ事ありあらず

すまゝい毛よりうて相好相とありあられとも
至徳の人と撰よよとよもると軍まの書と
と山重とありあう一重とよ厚良といふ人
りり的願とて額とくはれ肉とて白と筋とを
して悪相の事とてそりけるを指さしあま
ろ手相の事とて日城國とて位牌位といふ
このふりなりあうゆり殿法といふ人厚良の
りりくこととていひるをあ指さしあま
これとめふこととて相するいとよ書きあ
とよ厚良の云とていふれきりあう一相

あをさるるを俗にさるる也たんはくするをさるる
きめ何事とて賣りしを費し人の力を人
の力もや悔しき事とて買ひて死する人
持合ひることを縁うめとて納不費するもさる
たゆむいよ函相もう博くを相とするてさると
或書ふんえりちとよ締福を己とてし
といは酒小運して至めの人さるる事あり
ぬやしちる事とも今世河海の人へ善悪の相
よる所をさるる事とさるる事あり
むやくをぬを撰む事とさるる事あり
程子の流るも物

各物上行とあるをや

一軍の馬は華毛河原毛の事をいふ事とされ
しとていふ事とせらるるはしる事
なちうんたれとも二毛の事をはり今忘るる也
一予の南流する事とていふ事あり其流るるは
しる事あり

一第一志願と喪門同じ端六道矣負死圓たり
け毛をばはむといふ事とていふ事あり
か歌と

い正法はたなき喪門死圓也

一 此乃るまゝに笠の端と一車

一 一 幅とあるをまをえりハちうにこ
陸奥の凡より下りていへくも
初の内とくふにこよはせられと右に
のこくはいふく

一 相客より下りては、炭口のふら
缸のちうは、短命やう四目のあ
人にばしやせ

一 目のもろを、湯をぬきとを申
平馬

一 一 此乃るまゝに笠の端と一車

一 一 幅とあるをまをえりハちうにこ
陸奥の凡より下りていへくも
初の内とくふにこよはせられと右に
のこくはいふく

一 相客より下りては、炭口のふら
缸のちうは、短命やう四目のあ
人にばしやせ

一 目のもろを、湯をぬきとを申
平馬

脛ひろくよきと云ふは

脛代々款子

頰ろく脛と云ふは

脛のひろきは

一面代内にて

一肩の内を

一脛の内を

一脛の内を

一脛の内を

右の脛を以て

の第一かた

一 齒流の相柄を眼を歯を圓を早馬を智見

一 歯を以てして

一 齒せとねめる

一 齒せとねめる

一 齒せとねめる

一 齒せとねめる

一 齒せとねめる

一 齒せとねめる

一 齒せとねめる

一 後上日向の

摺墨を下総乃牧うゝいてゝゝとす

一 了るも大方駒の好まざるも此たりのさまはむらゝ
とかつゝ仕立居るのうらゝのゆゑにわゝいかに
白雲又十日差後六十日を録又十日として詔をせ
アそい先雲を嚙うゝいせそ指籠を付くる場を
しゝれ次ゝ靴をむて躍定を素志いゝ小躍つ
まうてをれまこと柏子ゝ梅人ゝ馬小時靴を從
を合て仕込ゝるゝたうゝ志うゝゝ今ゝる舞を号
はる者代詔を素志持たぬをみらたに三歳ゝの雲
をかま也靴をむてひゝさゝ四洲ををあらゝふ

しゝゝゝめりゝはゝゝゝとてめつけ梅子ゝ
ゝゝ梅人ゝゝ紙をひて時めいゝゝゝゝ小車
いゝゝめりゝ新詔を運ぶゝゝゝゝゝ大天を
んくゝゝゝゝ左手ゝゝゝも子里れゝゝ常りゝを
あまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
皆もゝゝゝゝゝゝ

一 粒子をよと上俾と名付をすゝるを下俾と名付
陽曲上俾ゝあり陰曲下俾ゝあり陰陽相兼ゝゝを
申解とせられけゝゝゝのゝゝゝをあらゝゝゝ
ひありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 せつりくして憚弱子馬あり憚つりくして
せ弱子あり又せつりくして憚生弱子
あり憚せつりくしてせ弱子あり
一曲馬代せりふ遅子早子あり又るりくあり
ありんふせりくして雙世りく返なきるん
母とれ曲物まてもりふ宗人ふゆへに度おてを
候あるりくする約りくの特曲候るをす
りく宗母りくをりくしてりくしてりくして
て度代りくりく解りするはら多りくをりく
西條りくありりくぬるるりくりくありりく

流管りく要舞ありてんりくりくりく海りく
りくりくりくりくありりくありりくりくやす
りくりくは宗ありりくりくりくりく
一 せりくの曲ありりく代ありりくありりく又大子あり
曲ありりくりく其りくありりく出曲りく切曲りく
曲りく曲りく止曲りくりく大曲りくを曲りくりく一理
ありりくりくりくりくありりくありりくりく
ありりく地りくありりく弱りくありりくりくりくありりく
といりくりく新報りく報りくありりくありりくありりく馬
口りくりくりくりくりくりくりく根前ありりくりく

を用て賣買を共の物としあまはさうの曲あ
はるとも兼ふあり——楠正成合剛山の壁書ふ
しん徳下を可とせとあらそや
一物とえらふ曲とあらふらあふらひてさ
はるともあふとさるや——さあはるはいうやと
をえてもあるとさるや——

一南尋みたるはあまはさうの曲と
ろろふんおとろふいとそ二曲を人としさるふ
とりふさるもをさるてふふ私ふあふさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる

一上まの名をばてはあむつら馬を、紫さ
あまのなりむく——と田といふ紫人ありさる
と紫さるせふかたあり——或時人の悪さといふ
て紫さるればさるを儲けていとむつら曲あ
かたあまさらしあまぬらさるてたつて後よ
のさるさるまこと小感念の理も通達した
めいふの人なりこれさる流乃門人なりさ
一馬をともつてさるて紫さるらふ——紫人のた
ひくかつらさるさるさるさるさるさるさる
田流の紫人としてさる敬下れさる地すさる

つのもういふらあつたふるれをまうしてま
らうとある一、まして曲あつるるとい
うこれとあり

一、まして一、まして一、まして

まきはいろいろもあつたふ

一、白馬の節會といふことも昔中におわく正月七
日小暮えれ馬を寄せしるをえく歳中れ災
と除くまうりといふるを初めよこれと自ら
の災難とのふふ事とつたふと礼部書とい
ふ

一、正月宗初八日馬福とあるある。日を夜といふ
一、り傳へる亦飛馬始と書と云説もありけ
時の湯と可といふ宗人の夜説と改と下とい
一、説やるよよたて六合と抄拂地道二遍地七
遍宗初の地道二遍なり亦同は、**ま**は陽月此同陰
月此同といふ宗初二ツの習あり初陽二遍は陽
二廻りあがりるは陰陽二廻り下、宗人は
二歳は明の方向して頭説せきれ留と留
三つて陽二むらいて宗出、初る時陽二向
てむらうとある宗初二、或法あつて用

事あり志事ありは傳

一 卷目は字法若者若れ式法あり宗人は家来

ありもの金議あり新皆具に合あり敬のは立

ありは取者よ吟味あり如くむつららこ

まゝ秘文は習あり

一 抄年々人の宗初と式法は先宗は人の傳授あり

一 大進物並懸 流瀆馬の傳文くむつららこ

事とまなり

一 報のは立伝多くおまあり流瀆の敬天地乃

報友の報と具式は報一本の報管網の報入部は

報曰節の報想して報よは傳授多きなり

責報は傳授と可しす節とかそて己長計ふ

切なりは傳

一 騎馬指掛は伝あり諸の留ありハ事よなり

てうそは騎馬指掛は伝ありもはひやありぬくと

さむは伝あり

一 例式の傳はるは性よ直して能押無と總と

如きそよそれはのは急なりまゝて四節は本

掛の時伝はるて一切の具よ傳授ありら好

なり

筋より一亭の建やう東南西北志たうして
修復あり場の口ありあり追廻れあり
長場後場小車して横に間敷あり土間の筋
横小寸法あり数々場小の腰板のありあり
砂れ志をなうありはしく控る場とつた修復
あり

一 筋は定積あり水流れ身やうありあり一筋の
口とハハ向てありありありあり七道の方ハ
控えて志よりありありありありありあり
一 筋の尻湯の尻ふてき杭の尻と志よりありあり

一 筋と志より一筋ハハ小吉日あり川入てきき
法あり

一 筋小押札の事

口傳

一 筋小縁なき人ハ筋小押札の事

口傳

一 世の系人をんハ小縁をうしありありと破り子
孫をすりありありありありありありありあり
かろしを挑はめありありありありありありあり
と歌としく響ふ志よりあり筋下洗されると
小も程よくありありありありありありありあり
よりして教らるるあり又一世の召るね馬とあり

とほりたん

一 子の海骨を切る 當海代はふく割結ふせ
させたるは傳事ハまれ久用事門の切とたれ
りそむたんはとふりうるをまめは代
ていまふ海骨を切し止るるとえしちりけ
は武陽へ引くる弱もとるふ留こらせ切
きるもともたりまに結くもくは結骨を割
禁らるゝしん武代は子の海骨はわらふり
きりしりしれを地りしちりてるとちり

利愛のまくとまらゝあしは流してし海を切
はくまゝなり武代は人の人軍用を所
あしりて没るくとちりしりあまらしり
らうたり

一 子の海骨を切るし老るの歯をさうて歳をあらと
んはるるむらゝはりてりまらとあはれ
醫者もむらゝはりてりまらとあはれ
くちとてりあたらは隆具の海骨の業歯を掘り出
したるは中園長の海骨の業とてりてり
たりとてりあはれ其世ふまをてりてり

小今更方小入るまうてゐるの類なる冬公云々
葉の時小和弁を以ても走るなり下りたるを
あしんくげれと志する。下りたるを志す
志すを志すを志す。又あるは面相志すまうまう
まうはたし

一足物と云ふも一なる山坂小入るつまづ
例如あたなりなり。若くは海邊細指細道
平なる也。一なるぬるなり。若くは志す
志す。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。
志す。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。

ゆきハ直落てつらり。或は尾れまらけ切ら
る。中坂下て。細指つらり。若くは志す。一なる。
指細及下りて。一なる。一なる。一なる。一なる。
と小指まらり。一なる。一なる。一なる。一なる。
お月や。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。
指たる。一なる。

一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。
尾を。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。
一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。
一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。一なる。

つゝの量有て是つゝは是まゝつゝつゝ
甲ささやちとすて節さうらうさるふとすて
を流沼川わさう山跡海峯と通るる文
よを坊さうしるさくそ内よまわさるありし
ふたうらさうしるさくそ内よまわさるありし
流さ思ふ八巻下しましる節さうらうさるふとすて
あるとは左よあゝはくさつ流を流さる
んまゝ

まゝは正月祭神の時節さうらうさるふとすて
ささうらうさるふとすて節さうらうさるふとすて
一神社佛閣の門さうらうさるふとすて
一神佛の天地体系明しるさるふとすて
まゝは正月祭神の時節さうらうさるふとすて
あゝ中俣の節さうらうさるふとすて
節を切て進むさうらうさるふとすて
序梅子とさる流のさうらうさるふとすて
是れはさうらうさるふとすて節さうらうさるふとすて

切さるおやほきりぬのしぬをさすに輝おとろ骨
肉やつし老るれぬをさすしんたつらと
こやして命結ししありし切となる
一筋をさす計のぬまありふりしとさす
らる身とさく暇とえ出し鼻吹同を溜息
をつら思身とさるかしとたれすある
として願削同候して昔し多なるありさす
をさるもけしと事あり或は月のまじり
神とさしんたつらるもあり肩と板面
をさす板切て胡よさ落しありさすはとけ

漸削候もあり或は礼足となり或は曲けり
さるる馬もありかくてぬさく板切てさ
し出さるとしと歩方角もさすれはと端を
極るもけしと事ありし切となるもさす
とさしとさすもさすもさすもさすもさす
さすもさすもさすもさすもさすもさす
もさすもさすもさすもさすもさすもさす
さすもさすもさすもさすもさすもさす
さすもさすもさすもさすもさすもさす
さすもさすもさすもさすもさすもさす
さすもさすもさすもさすもさすもさす

ありくうめく若く痛楚よれさそ切
尾一毛入我身又心さとりて志くむお人
人飛うまをとりらこいさめしきんやお成
まふ一毛とさう尾をとりてあこなる
のまほり思なりしこもたけ終ふは
う神符あうるの一念そ人又
減えりしは志むらなり

一毛の歯を磨く歳をり人又くつんせく
なりて世後る者あり五世を敷といひ人の
といふ毛を若むといひたしそ

まんや歯を磨く毛しるおを
と根を磨く毛しるおを
つるふま老ぬれ毛ふり
るおかりさうふらうて
長をとり強歯の内を
六歳歯の七歳なる
なりえり毛とも
ありえりわうれし
ふさふさうれなり
か食といとも

この一式ハ新羅のこりして意しうてきまこと
ふけ時毎よまを人をもよほしうてりしとて
さしんや

一尚流ハ八幡太郎義家公より政相宗礼式軍
用血脈一貫の奉的々相續して六條判官為義公よ
り傳てて本末大坪流となるハ條流も義家公よ
り八條守倉流礼式宗馬政相の四郎を傳てて本
枝八條流となる日友流も八幡殿より鴨二郎義
總政相宗礼式軍用礼式傳てて日友友合者より
いふてて本末枝日友流となる小笠原流も義

家公より新羅二郎義光政相宗礼式軍用乃
五郎を傳てて小笠原宗信より發てて本末枝
小笠原流となる本末流より日友公介て四流
となる依て四流の叙大概同なり小笠原よは
美母中道の支流より日友よは本傳妙流より傳
わり八條よは智徳本傳の支流より當流よは
一貫の支流あり此是一貫の位なりんけ四流
ありて天下よはまされりまゝに本末
といふ大坪流よりして門下八の之家より云
たし

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

